

季節を詠む、
時流を詠む

四季の歌



美野里短歌クラブ

子供らが南瓜の菓子に笑み交わす今宵満月ハロウィンなりし
雨上がりパステルカラーの虹かかり何かいい事起るだろうか
湖にゆれる帆引きの舵をとる船頭たちのたくましく見ゆ
白鳥の一羽おりたる遠州池「久しぶりね」と声かけ行けり
新聞を取りに出たれば柿の実に群がる鳥の急ぎ飛び立つ

小川短歌会

後戻り出来ないはずと知りてなお短い残生楽しくしたい
児童らの姿とだえし廃校にひっそりとたつ稽医館の碑
寒なきの陽のあたたかし通勤の人らコートで腕にかかえて
腰曲る媪九十才がネギ畑の畝ふかぶかと鍬ふるう技

玉里短歌会

夜のしじま明かりのような蠟梅のまろき蕾に頬よせてみる
春を呼ぶ彩り楽しきチャーハンにピーマン嫌いを子は忘れたり
願かけるお百度参りははやらねど信念貫き祈る日々あり
谷川に沿い登りゆく宝篋山雲降り初む頂上は雪らし
雪風巻く矢吹インター入口の赤信号が我を拒絶す

寄稿

青春の友の教訓今も尚転ばぬ先の杖となりたし
玄関に季節のお花咲き揃ろう

菱沼清子 菱沼友江 宇都宮和子 碓谷きえ 白根澤清香
根本智恵子 中根良子 石田はる江 幡谷啓子
齋藤かつみ 野口初江 石橋吉生 高田久子 正木敦子
藤田久子 藤作茂登子 深作茂登子

みづうみ俳句会

乳母車吾子の手の先つくしの子
水ぬるむ水琴窟の音となる
水温む朝の散歩の軽やかさ
池の鯉餌に群がり水ぬるむ
コロナ禍に訪うる人無く春隣

みのり俳句会

日脚伸ぶ夕日が赤く遠筑波
水戸の梅見せたき人の今は亡き
冬の草たやすく抜けぬ強さあり
何もなきことありがたき日脚伸ぶ
春立つや村一斉に始動する

檸檬の会

笹鳴きや杜の明るき所より
啓蟄や役員決まりティータム
筑波嶺を大山にする雲の峰
棒パンの硬さ噛みしめ古雛
忌を重ね夫の作務衣と紅白梅

くるみ俳句会

境内の踏む玉砂利に春の音
一畝の冬菜に群るる野鳥かな
日溜りに小さく咲けり犬ふぐり
右に加波左は筑波日脚伸ぶ
苔むした墓標の文字や春きざし

玉里俳句会

梅香る凜と建ちたる新校舎
木蓮の蒼ゆつくりほぐれ初む
蝌蚪寄りて水ゆるやかに動きけり
卒業を見届け空のなお青し
竹林を背にして白し枝垂梅

小美玉川柳会

令和二年余白だらけの手帖閉じ
旅プラン地図で確認なぞるだけ
何も無い空なのにまた見上げて
春の気にそそれれひとり車旅
国軍は野蠻人かなミヤンマー

長島美奈子 榎本喜代子 三村れい子 長島久美子
坂藤清子 佐田草心 島田清子 白根澤千代
井田あさ 村田忠子 塚田小夜子 岡島小夜子
松崎淑子 安彦昭山 荒井栗山 大曾根エミ
長谷川光男 斉藤富子 松田通喜 菅谷きい子
原富貴子 枝川白史 流川悟史 裕川進
岡島進